

池波正太郎

剣客商売



新

けん かく しょう ばい
剣 客 商 売

新潮文庫

い - 16 - 23



昭和六十年三月二十五日 発行
昭和六十一年十一月十五日 刷

著 者 池 波 正 太 郎
いけ なみ しょう た ろう

発 行 者 佐 藤 亮 一
さとう りょう いち

発 行 所 株式 会社 新 潮 社
しやくし かいしや じんしやう しや

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六―五一
電話 編集部(〇三)二六六―五四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛てご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本株式会社

© Shôtarô Ikenami 1973 Printed in Japan

ISBN4-10-115623-9 C0193

新 潮 文 庫

劍 客 商 売

池 波 正 太 郎 著



新 潮 社 版

3373

目次

女武芸者	七
剣の誓約	六
芸者変転	二〇
井関道場・四天王	一四
雨の鈴鹿川	一八
まゆ墨の金ちゃん	三
御老中毒殺	二七

解説 常盤新平

劍^{けん}

客^{かく}

商^{しょう}

売^{ばい}

女 武 芸 者

一

冷たい風に、竹藪たけもよがそよいでいる。

西にひろがる田圃たんぼの彼方かなたの空の、重くたれこめた雲の裂目さけめから、夕焼けが滲にじんで見えた。

石井戸のあたりに先刻から、鶺鴒みそぎぎがしきりに飛びまわって、澄みとおった声でさえずつてゐるのを、この家の若い主あるじは身じろぎもせずに眼で追っていた。

まるで巖いわおのようにたくましい体軀たいくのもちぬしなのだが、夕闇に浮かんだ顔は二十四歳の年齢より若く見え、浅ぐろくて鞆革なめしがわを張りつめたような皮膚の照りであつた。

若者の、濃い眉の下の両眼の光が凝っている。小さくて敏捷びんしょうなみそさざいが数羽、飛び交っているうごきを飽きもせずに見入っているのだ。

台所から根深汁ねがじり（ねぎの味噌汁みそじ）のにおいがただよつてきている。

このところ朝も夕も、根深汁に大根の漬物だけで食事をしながら、彼は暮っていた。

若者の名を、秋山大治郎だいちろうという。

荒川が太川おおかわ（隅田川）に交つて、その流れを転じようとする浅草の外れの、真崎まき稲荷明神社に近しやい木立の中へ、秋山大治郎が無外流むがいりゅうの剣術道場をかまえてから、そろそろ半年になるうか。

「これからな、お前ひとりで、何も彼もやってみることだ。おれは、もう知らぬよ」

こういつて父の秋山小兵衛こへえが、ここへ十五坪の道場を建ててくれた。廊下をへだてて六畳と三畳二間ふたまたきりの住居があつても、道具類はほとんどない。食事の仕度は、近所の百姓の女房がしてくれる。

台所から出て来た、その女房が井戸端に立ちつくしている大治郎の前へ来て、手てまねで夕飯の仕度が出来たことを告げるや、振り向きもせずおに帰つて行つた。

女房、啞おなのである。

大治郎が、ようやく家へ入つた。

根深汁で飯を食べはじめた彼の両眼は童児のごとく無邪気なものであつて、ふとやかな鼻はたのしげに汁のおいを嗅かぎ、厚い唇くちはたきあがつたばかりの麦飯をうけいれることに専念おしきつているかのようにだ。

食事を終えたとき、すでに夜の闇がたれこめていた。

いまのところ、ただの一人も門人がいなくて、出入りする者も啞おの女房だけというこの家へ来客があつたのは、そのときであつた。

客は中年の、立派な風采ふうさいの侍で、

「大垣四郎兵衛と申す」

と、名乗った。

秋山大治郎にとつて、見たことも聞いたこともない侍なのである。

六疊の部屋へ招じ、大治郎は白湯さゆを汲くんで出した。この家には茶の用意もない。

大垣は、殺風景な部屋のありさまや、清潔ではあるが、いかにも質素な大治郎の服装みなりなどをじろじろと見まわしていたが、急に、こぼれるような笑顔となり、

「この夏、田沼様御屋敷内にて、そこもとの御手なみ、しかと拝見いたした」と、いった。

大治郎は、うなずいた。おぼえのないことではない。

「田沼様」というのは、幕府の最高権力者である老中ろうじゅうの一人・田沼主殿頭意次とのものかみおきつぐのことで、現十代將軍・徳川家治いんはるから深い寵愛せうあいをうけている田沼老中の威勢は、

「飛ぶ鳥も落す勢い」

などと、世に評判されている。

田沼意次は、今年の春に將軍から七千石の加増をうけ、遠江とおとうみ（静岡県）相良さがら三万七千石の大名と成り上ったが、もとは三百石の幕臣にすぎなかったそうなる。異常の立身出世というべきである。

今年の夏。

浜町^{はまちょう}の田沼家・中屋敷（別邸）でおこなわれた劍術の試合には、江戸市中に立派な道場をかまえる劍客たちや、諸藩自慢の劍士たちが三十余名もあつまり、技を競った。

この中に、年齢も若く無名の一劍客にすぎなかった秋山大治郎が参加し得たのは、異例のことである。

大治郎は当日、七人を勝ちぬき、八人目に相手となった信州松代^{まつしろ}十萬石・真田侯^{まんだこう}の家来で森藏人^{くらんと}という劍士に敗れた。

しかし、名も顔もまったく知られていなかった秋山大治郎の試合^{みごと}ぶりのみごときは当日の話題となったもので、いわば大治郎、將軍おひざもとの江戸の劍術界へのデビューを飾るに足る成績をのこしたわけだ。

この「晴れの試合」に出場できたことは、

（父のおかげだ）

と、大治郎はおもっている。

ところで……。

この夜。大治郎を突然に訪問した大垣四郎兵衛は、田沼邸での大治郎の試合を見ていたものらしい。

「いや、まことにもっておみごとな……」

と語ることばに、いささかの嘘もない。

「それで、私に何の御用なのでしょう？」

大治郎が問うた。ものやわらかな声である。

「されば……」

ひざをすすめて大垣が、

「おたのみいたしたきことがござる」

「はい？」

「世のため、人のためになることでござる」

「ははあ……？」

「御手なみをおしめし下されたい」

「試合をせよ、と？」

「ま、そのような……」

「そのような、とは？」

「人ひとり、その両腕を叩き折っていただきたい。切り落すのではない。両腕の骨を折っていただきたい」

「……？」

「まことに失礼ながら、これを……」

いいさして大垣が、ふところから袱紗ふくさ包みを出し、

「金五十両ござる」

五十両は、当時の庶民が、らくらくと五年を暮すことのできる大金であった。

「おねがい申す」

と、大垣が両手をつき、

「貴所を見こんでのこととござる。世のため人のためとござる」

「どこのだれの腕を、いかな事情にて叩き折れと、申されますか？」

「名は……名は申せませぬ。御承知下さるならば、われらが手引きいたす」

大垣の鼻のあたりに小豆あずきほどの黒子ほくろがあつて、これを左の小指でしきりに撫なでながら大垣四郎兵衛は、

「まげて、御承知ありたい。首尾よく仕終しおせたるのちは、のちのち貴所のためにもなりましよう」

と、いった。

それでいて、事情と相手の名と居所を、大垣は絶対に語らぬ。

秋山大治郎は、執拗しつとにねばりぬく大垣を、ついに、

「おことわりいたす」

追いつ返してしまつた。

二

翌日の昼前に……。

大治郎は、父・小兵衛の住居へ出向いた。

すぐ近くの橋場町から、大川をわたつて寺島へ着く舟が出ている。百姓渡しで二人の舟守が二艘の舟をあやつっていた。

六十八間余の大川をわたつて対岸の寺島村へ着くと、田圃道の向うに堤が横たわり、もの本に、

「官府の命ありて、堤の左右へ桃・桜・柳の三樹を植させられければ、二月の末より弥生の末まで、紅紫翠白枝をまじえ、さながら錦繡をさらすがごとく、幽艶賞するに堪えたり」とあるような景観が展開し、あたりには木母寺・梅若塚・白鬚明神などの名所旧跡が点在して、四季それぞれの風趣はすばらしく、秋山小兵衛がこのあたりへ住みついでから、もう六年になる。

小兵衛の家は、堤の道を北へたどり、大川・荒川・綾瀬の三川が合する鐘ヶ淵をのぞむ田地の中の松林を背に在った。

わら屋根の百姓家を買収して改造したもので、三間ほどの小さな家である。

秋山大治郎は堤の道を左へ切れ、松の木立をぬけ、裏手からまわつて父の居間の縁先へあらわれた。

父の小兵衛は、寝そべっていた。

ならんで立つと、大治郎の胸のあたりへ、小兵衛の白髪あたまがようやくとどく。

大治郎の体格が特別にすぐれているからではない。

現に……。

寝そべっている小兵衛のあたまをひぎに乘せ、耳の垢をとってやっている若い女は、この近くの関屋村の百姓・岩五郎の次女でおはるといふのだが、別に大女でもない。

だが、おはるのひぎに寝そべっている小兵衛を見ると、まるで母親が子供をあやしているかのようにあつた。

「小兵衛」とは、よくも名づけたものである。

「若先生が、見えたよ」

と、おはるは、まことにもつてぞんざいな口調で、小兵衛へいいかける。

うつとりと眼をとじたままで、耳掃除をさせながら小兵衛が、間もなく六十になろうという老人とおもえぬ甘い声で、

「そうかえ」

と、こたえる。

「父上。おはようございます」

きちんと袴をつけた大治郎が折目正しくあいさつするのへ、小兵衛は、

「おすわり」

「はい」

「根深汁の、においがするな」

「あれ、しませんよ。そんなにおい……」

と、おはる。

「いや、せがれの体からのおつてくるのさ」

いいつつ、小兵衛が左手をのぼし、おはるのふつくらとした胸もとをさわった。

おはるが嬌声きやうせいを発した。

大治郎が、眼をそらした。

「大や。何か用かえ？」

「実は……」

大治郎は昨夜の、ふしぎな来客のことを父へ語った。

長らく父のもとからはなれていて、今年の二月末に江戸へもどつて来た若い自分が、老中・田沼意次の屋敷でおこなわれた試合に出場し、その力量を田沼老中をはじめ、幕府高官の前にしめすことができたのは、諸方に顔のひろい父の、ひそかな周旋があつたろうことを大治郎はわきまえていた。

それだけに、田沼邸での自分の試合ぶりを見て、怪しげな依頼をしにあらわれた中年武士のことを、

（いちおう、父上の耳へ入れておかねばならぬ）

と、おもったのである。

「ふん、ふん……」

と、きき終えてから小兵衛が、